

まんだら通信

第189号 (通巻225号)

平成24年03月 西暦2012年 佛暦2578年 皇紀2672年

安房国八十八ヶ所 第一番札所
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口 1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org



放射線ってそんなに怖いのか？

『千年に一度』の、嘗てない大震災に見舞われた三月十一日が巡ってきました。
関東大震災や阪神淡路大震災に較べて、政府のダメ加減に腹を立てっぱなしの一年でしたが、遅まきながら復興のつち音が聞こえてきて、胸をなで下ろしています。
ただ、今回の震災と大津波では原子力発電所の事故という、日本では経験したことのない大災難が加わりました。
そして、発電所の建物が爆発して沢山のチリに載って放射線がまき散らされ、そのチリが身体に触れたり、吸い込んだりするとガンになるといわれますが、どの程度までなら大丈夫なのか。
中部大学の武田邦彦先生のように「安全なのは一年一ミリシーベルトまで」とい

う方もいますし「いや、そんなことはない。千二百ミリシーベルトでも大丈夫」という学者さんもいて、議論を聞く度に益々わからなくなってしまう。
そこでこの一年、インターネットや本や雑誌を、独学で勉強して得た結論は次のようなものです。
私は、政府が言っている一ミリや一〇ミリではなく、年間百〜二百ミリシーベルトで、安全は十分に守れると思っています。

『論より証拠』という言葉があるように、証拠に聞く方が正しいと思うのです。
福島市飯坂温泉の名物ラジウム玉子は、私の大好きな半熟玉子ですが、ラジウムを含む温泉で茹でたものですね。
鳥取県に、三朝温泉というところがあります。他の土地に較べてラドン

の放射線は二百倍位あるようですが、この人たちのガン死亡率は全国の半分以下で、特に大腸ガンは五分の一以下だそうです。
何よりも岡山大学は、この温泉の放射線を利用した『三朝医療センター』を作って、研究と医療をしています。
月刊誌WILL四月号、渡部昇一さんの『原発興国論!』に、アメリカのラッキー博士からの、日本人への忠告が載っています。

「世界のメディアの大半が、放射線はすべて有害であると思いついて、もし日本政府が二十一年三月の地震と津波がもたらした福島原発の事故への対応に当たって、こうした思い込みに対応に当たって、既にあるに支配されるなら、既に苦境にあえぐ日本経済が、途方もない無用の失費に打ちのめされることになるだろう」と

いうものです。

ラッキー博士は、放射線医学の世界的権威で、NASA(アメリカ航空宇宙局)の依頼を受け宇宙飛行士の健康管理を長年行つた結果、年間の被曝量白ミリシーベルトの時、『放射線ホルミシス効果』と

宇宙の方が放射線が多いのは常識ですが、宇宙飛行士古川聡さんが半年の宇宙船での生活から帰ってきた時、百八十三リシーベルトの放射線を浴びた計算です。女性の宇宙飛行士も帰還後に出産したそうですが、元氣な赤ちゃんを生んだということ。もし放射線がそれほど危険なら、アメリカのような、人権には殊の外うるさい国で、宇宙飛行士を送り続けることはできない筈ですね。

我が家は去年秋から、福島産のお米を通信販売で送ってもらっています。
何度も書くようで気が引けますが、『絆』とか『がんばろう東北』などと、直接被害に遭わないみんなも、被災した人々を応援したつもりでいます。

でも「瓦礫の処理をお願いできませんか」といわれると、石原さんの東京都以外、もつともらしい理屈をつけて断るといふ見苦しい様子に、東北の人たちは「やはり見捨てられたのか」と思うでしょう。たとえ有害でも、私たちもお手伝いしましょう、というのが人情ではありませんか。間違つた放射線基準のせいで、帰るに帰れない福島の人たちや、置き去りの家畜やペットたちのためにも、政府は放射線基準量を大幅に改めることを願うばかりです。

◆上の野島崎灯台の写真。

館山の中村さんが、趣味のエンジン付きパラグライダーから写して下さったものです。一番向こうの岬を廻ると館山市布良(めら)。

東京湾の入り口の洲の崎は更にその先になりますね。そんなこと、土地の人なら当たり前で、わざわざ書くまでもないのですが、この『まんだら通信』を途中からお読みになったり、インターネットで紫雲寺のホームページから外国で読む人もいますので、時々広い範囲がわかるような写真を載せます。◆孫の龍祐は、震災の後片づけにお仲間と何回も東北に行きました。今日からは3泊4日の予定とかで福島県の小名浜行きです。

亡くなった方々の1周忌の慰霊法要のためだそうです。

泊まる場所は、朝食付きで1泊3,200円のビジネスホテルだそうで、そんな安いところがあるのかとビックリしました。

◆今月は野草...ではなく、灌木で、キブシ科キブシ属のキブシ(別名キフジ)です。

この頃、動物や植物の名前はカタカナ書きになって、読みにくいばかりか意味がわかりにくくなりました。漢字なら木五倍子で、五倍子(ふし)は、元はヌルデの葉につくヌルデシロアブラムシが作る瘤から黒い染料が採れるのだそうで、結婚した女性がお歯黒に使ったのだそうですね。キブシはその

代用として使った...ということだそうですね。ややこしい話になってしまいました。早春の言葉が似合うこの季節。毎年車の窓から、もうそろそろかなと気をつけています。緑色の少ない林などに、淡い黄色の小鈴のような沢山の房が見えると、ようやく今年も春が目の前だと実感できます。

朝から雨降りでしたが、お昼前写してきた一コマです。

◆手術からのご回復を願っていた天皇陛下は、明後日行われる東日本大震災の追悼式へお出ましの上「お言葉」を賜ると聞いて、ひとまずホッとしています。この上は一日も早いご全快を、お祈り申し上げます。2012/03/09 龍渉



余滴

にっぽん人情小噺

二遊亭鳳豊

第七十四話 謎かけ

皆さん、突然ではございますが、目上の方を含めまして、住所のわかつているご友人が何人いらつしやいますか。

そうですね、年賀状を書くとき、わかりますね。住所録を開きながら、「ああ、この人は亡くなった……」とか、「定年になつて、会社はわかるけど、お住まいがわからない」とかいいながら、住所録に横線を入れて消したりしてしまつてね。

住所録って、大切ですよ。

実際、末期がんで余命を宣告された方が、住所録を家から持つてこさせて、十数人の友人の住所の欄に二重丸をつけ、家族に、「私が死んだら、この人たちだけにこの手紙をコピーして郵送してくれ」と手渡したそうです。百数十人の名前が書かれたなかの、十数人ですから、本当の友人だったのかもしれない。

そこには、こう書かれていました。

「私は末期がんを宣告され、一生懸命闘病してきましたが、薬石効なく、いよいよ最期の時を迎えることになりました。思い起こせば、長いようで短い一生でした。でも、こんな拙い私の人生ですが、あなたに逢えたことで、ここまで生きてきた甲斐がありました。あなたに教えられ、育てられ、励まされ、いっしょに思い出を共有できたからこそ、ここまでなんとか生きられたのだと思います。『人は何かの使命を持つて生まれてくる』と申します。私は一生を通して、世のためになるようなたいしたことはできませんでしたが、いまでもそのことを後悔していませんが、ただ、あなたに逢うためにこの世に生まれてきたのだと思うことで、救われます。

あなたに逢えてよかった……。本当に、本当にありがとうございます。残された家族をよろしく願います。さようなら」

そして、もう一通、奥様にあてた手紙があつたそうです。

「長い間、世話になつたね。ありがとう。感謝です。心やさしい君と一緒になれてうれしかった。幸せ者だ、僕は。君は、死ぬ時はいっしょだよと言つてくれた。でも、君は僕よりも七歳若い。だから、あと七年間生きて、その間に起こつたことを日記に書いて、それを持つて、僕のところに来て話しておくれ。『あなたが死んでからねえ、こんなことがあつたわ』『そうそう、あれからねえ……』という話をたくさん聞きたいからね。元気でね。大好きだつた……。さようなら」

奥さん、涙のあとがたくさんついたその手紙をいまでも大事にしているそうです。人間、死に方つて大事ですね。私も、こんな話がありますので、聞いてください。

ある時、若い頃によく私のことを面倒をみてくださった方の娘さんからお手紙が参りまして、「父が長い間、病院で闘病生活を送つておりますが、死ぬ前にあなた様はどうしてもお逢いしたいと申しております。ぜひ、ご連絡をいただきとうござります」と書かれておりました。

そういえば、ここ二十年ほど、お逢いしていない。年齢を計算してみたらもう八十歳になつておられる。たしかに、この方にはお世話になつた。早速、お見舞いに行こうと思ひまして、手紙に書かれていた電話番号をたよりに、娘さんと連絡をとりまして、その方が入院されている病院にうかがつたんでございます。

「お父さん、鳳豊さんが来てくれましたよ」入院されているから、病室にいらつ

しやるかと思つたら、処置室というのですかね、下がタイル張りの、いまにも手術でもしそうなところに機械につながれていらつしやいました。

昔は丸々とよく太つていらつしやつたのに、頬が落ちて別人のようでしたが、笑顔が子供のようで、「おお、鳳豊ちゃん、よく来てくれた。あのね、あのね」と手招きをするんです。なんだろうと思つて、顔を近づけますと、いきなり「吉田幸三とかけて……」というんですね。吉田幸三というのは、その方のお名前です。

「え、何だろう？」とびつくりしましたが、そういえば、この方は落語通だつたというのを思い出したので、「はい、吉田幸三さんとかけて」と言うと、「小林一茶ととく」と言うんです。私も、しかたなく、盛り上げる感じで、「はい、吉田幸三さんとかけてまして小林一茶ととく。その心は！」

すると、満面の笑みで言いました。「ハイジン、ハイジン」。

笑えませんが、そんなこと。だから、私もすぐに言い返しました。定番のあれです。「吉田幸三さんとかけてまして」。すると、吉田さんは驚いたように、「え？ 吉田幸三とかけて？」「ろうそくととく」。「その心は？」「身を細めても、まわりを明るくするでしょう」。

すると、吉田さん、私を指さして、何て言つたと思ひます？「考えてきたら、考えてきたら」。

吉田さんは、ベッドで「ハイジン、ハイジン」というのを考えて、どうしても私に聞かせたかつたんですが、とつさに私が返してしまつたので、私も「考えてきた」と思つたにちがひありません。

その時、近くにいたお医者さんが飛んできました。「すみません、どなたか知りませんが、す

ぐに帰つてくれませんか。吉田さんの心臓の脈拍数と血圧が異常です。早く、早く、この部屋から出て行つてください」

私はあつと言う間に、部屋を出されてしまいました。お嬢さんがあとから飛んできて、「ごめんなさい、父はとても喜んでいました。今日はありがとうございます」と言つてくれました。

そして、それから一カ月後、吉田さんが亡くなったことを知りました。いまでも、「考えてきたら、考えてきたら」とベッドの中から私を指さした、吉田さんのその姿は忘れられません。謎かけを考えついて、それをどうしても私に伝えたかつた落語ファンがいたことは、いまでも、私の誇りであります。

今月も三遊亭鳳豊師匠が月刊誌MOKUにお書きの人情ばなしの転載です。

この雑誌は月千八百円と少々高いのですが「生きる意味を深耕する」と表紙に謳っている通り、大向こう受けばかり狙つた雑誌や書籍が多い中、いふし銀のように、地味ではあるけれどももうなずく記事が多い雑誌です。

普通なら滅多に有り得ないことですが、MOKU出版と鳳豊師匠には私の転載の希望を快く受け入れて戴きました。

お陰様で、今ではこの「日本人情小噺」が楽しみで毎月待つています、という読者の方が多くなつてきました。

余滴の続き

◆去年の原発“事故”以来、“脱原発”運動が息を吹き返しました。原子力発電ができなくなったことで、天然ガスや石油に切り替えたため、大幅な料金値上げになります。本当は、原子炉が壊れたというより、予想された津波の対策を怠けたための“人災”が正しいのです。

その証拠に、あの事故を見て、すぐにアメリカは34年ぶりに原発の着工を決めましたし、韓国は日本海側の慶尚北道に2基の建設を決め、他に2基の試運転を始めたということです。

更に80基の輸出を、国として決めたということです。